

サキユガス

変性

A TALE OF
SEX CHANGE BY

TS譚

TRANSMOGRIFYING
SUCCUBUS



変性サキユバス
TS譚

朱い月が出ている夜は気をつけろ。
小さいころにそんなことを言われた覚えがある。
だけど、それを思い出したのは、目の前に朱く綺麗な月が現れてから。

いつものように友人と二人で依頼をこなして、泡銭を得た後、いつもよりも静かな酒場で夕飯を食べ帰路に着いている途中だった。

外は朱い月に照らされ静まりかえり、古都の整えられた街路には人っ子一人いなかった。

「なんだあ？ 今日はやけに静かだなあ」

冒険者になりたての僕らは、無理をして酒精の強いお酒を飲んでいた。
僕の相棒が顔を真っ赤にして、ケラケラと笑っている。お酒がそこまで強くないのに良くバカをしているなああと毎回思うけれど、いつものことなのでこの状況には慣れっこだ。
でも今日は違う。

「……アル、急いで宿に戻ろう」

僕は相棒のアルに忠告をした。

ほどよい気分の酔いは冷や水を浴びせかけられたかのように覚めた。

道には一人としていない、酒場の人もお客さんも併設の宿に泊まるよう勧めていたような気が。

「なんだよ、クリス」

「朱い月はダメだ。思い出してよ」

朱い月の夜に男が散歩けば、サキユバスに食われる。そんな迷信紛いの言い伝えがあった。
それはどこの町や村、ひいては国の大都市にすら伝わるやんちゃな男の子を大人しくさせる方便。

そう思っていた。

だっていままで、朱い月なんて生まれてこの方、十四年、冒険者になって二年、ただの一度も見た事が無かったのだから。

「ははっ、サキュバスってあれだろ、男の精を食う女の化け物、いいじゃねえか、クリスも男にして貰え！」
ガハハと場違いな笑いを挙げるアルは、酒場からくすねてきたであろう林檎酒の瓶を大きく煽る。

アルも朱い月の伝承は知っていたようだ。けれども酒に酔ってしまっただけで頼りが無い。

「全……」

大きく溜息をついた。

結構本気で困った。僕は伝承は重んじるべきだと思うし、きっとこういう時は悪いことが起こると直感している。

口減らしで里を追い出された僕がこの街にやってきて冒険者となったその日、同じように冒険者となったアルと組むことになった。

それからの縁。そんなに長い間組んではないけれど、それでも気心は知れている。

豪快さと、自分の欲求に素直な、僕より年上の仲間。それがアルだった。

口減らしの為に追い出されてひとりぼっちになってしまった僕に、笑いかけながら冒険に誘ってくれたアルを守ってあげたいと思っている。これがあつたから、腐らず生き延びることが出来たのだから。僕の種族固有の恩義、みたいな物だ。

「くすくす」

感慨に耽っていると、不意に小さな笑い声が僕の頭の天辺から生えている耳に聞こえた。

獣人族特有の聴覚の良さ。

いきなりの声に警戒心が大きくなる。

「だ、誰だ」

誰何の声をあげた。

あたりを見回しても酔っ払っているアル以外は見受けられない。

「上よ」

返答は短く、澄んだ女性の声が聞こえた。

見上げればそこには、山羊の角を生やして悪魔の様な羽をはためかせた女性が足を組みながら僕達……いいや僕を見下ろしていた。

月夜だというのに、周囲の様子が分かるくらいには明るい闇夜の中、深い紫色の瞳が僕を値踏みするよう見据えていた。

「かわいい……。久々のご馳走ね」

楽しそうに顔を歪ませて、真っ赤な舌がちろりと舌なめずりをしたのが見えた。

そして僕の目の前においてくる悪魔の様な女性。

扇情的な衣服を身に纏い、色香を無遠慮に振りまいている。街角で出会ったらドキドキしてしまいそうな出で立ちだ。

「初めまして、貴方は朱い月夜の噂を知っている子？」

おっとりとした声色とは裏腹に、目の前の女性の瞳は獲物を狩る猛獣のようだった。

「しつて、る」

視線に射竦められ、言葉に詰まる。

「それなら私がおか分かるでしょう？」

口元を隠しながら小さく笑う女性。朱い月夜の噂。それは僕がアルにさっき言ったばかりの物だ。多分そうだろうと薄々感じていた。

扇情的な衣服を着た、悪魔のような女性。

「サキュバス……！」

「せゝかい☆」

サキュバスは楽しそうに嗤う。

「じゃあ、早速だけど」

ひらりとサキュバスは僕の目の前におりてきて身を屈めると、僕の額を人差し指で押した。ぐらりと、視界が傾く。

いいや違う、景色が変わっていく！

煌々と朱く染まる夜の街並みから、ごくありふれた宿屋の一室に。

「初めてが外なんてナンセンスだからね」

「一体、どうなつて……!」

「ここは泡沫の夢の中。夢と現実の狭間。簡単に言うとサキュバスの力だから、あまり深く考えない方が
良いよ？」

部屋の中を見渡す。あたりには扉も窓も見つからない。あるのはベッドと、火の入ったランタンくらいな物だった。

気がつけば肩を貸していた酔っ払ったアルの姿も消えて無くなっている。

「そんなに警戒しないでよ、ただとつても気持ちいいことするだけだから」
するりと、僕の首に腕を巻き付けて顔を近づけてくる。

絶世の美女もかくやと言わんばかりの見目の美しさにただそれだけで、心臓の鼓動が跳ね上がる。
綺麗とも可愛いとも言える見目だ。

「ほら、私の目を見て？ 体を預けて？ 一緒に素敵な夢を味わいましよう？」
まるで瞳に吸い込まれてしまうような感覚を味わう。そして意識が変わった。

目の前のサキュバスへの忌避感が消えた。
「あはっ、簡単にひっかかるのね」

間近で舌なめずりをするサキュバスが愛おしくさえ思う。

「大丈夫、きもちいいこと、全部覚えてるから☆」

唇が迫る。ぼくはそれを抵抗すること無く受け入れた。

重なった唇から舌を差し込まれ、舌同士が触れ合いくちゅりと水音を立てる。

「んー……ちゅっ♡」

ちゅっちゅっつと啄むように唇を触れ合わせたかと思えば、唇を覆いにゆるりと口の中に舌が入り込んでくる。

「一生懸命でかーわいい」

キスの嵐についていくのがやっつとだというのに、相手は余裕綽々で唇を離すとぼくにこやかな笑みを浮かべてくる。

それが胸をときめかせる。

暫くそうやって長く甘いキスを堪能しているとベッドにストンと押し倒された。

気がつけば服は無くなっていた。目の前のサキュバスも扇情的な衣服は既に消え去っていて丸裸だった。形の良いおっぱいが大きく揺れてぼくの目の前に飛び出してくる。

何をされたのか分からない。でも、ぼくの右足の上に跨がってきた事だけは分かる。

「さ、わ、る？」

サキュバスが両手でおっぱいを強調しながら問い掛けてくる。

それにぼくは静かに首を縦に振った。アルから聞いていた女性の身体の柔らかさを、ぼくは今身をもって知ることになる。

恐る恐る伸ばした手が胸に触れると、

「んふっ」

吐息が耳に届く。

そんな吐息を無視して、触れた指先に力を少し入れると、指先が沈み込んでいく。

「あん……」

大きな瞳を閉じて、サキュバスが小さく喘ぐ。

「んちゅ」

そしてその喘ぎ声をごまかすように、ぼくの唇が塞がれた。

ゆっくりとぼくの方に身体を倒してきた彼女からぐちゅりと湿り気を帯びた音が耳に届いてしまう。獣人族特有の聴覚で音の出所を探ると水音はぼくの足に跨がっているサキュバスの股間からしてきたようだった。

ああ、彼女も濡れているんだ。

そう思うと、安心感とともに、サキュバスの肌に触れていたぼくのおちんちんが大きくなっていく。朝くらいにしか完全に勃起したことが無かったそれが、今からの行為に期待をしている。

完全に勃起したそれは、密着していたサキュバスの腹部を強く押し返すほどに主張をしている。

「可愛いわね♡なあに、もう期待してるの？」

勃起して排泄器官のおちんちんから生殖器としてのペニスに変貌したぼくのそれをサキュバスは優しくなで上げる。

ペニスの付け根から尿道と裏筋、それから亀頭をゆっくりと辿られただけだというのに、女性との性行為を知らなかったぼくにはそれだけで刺激が強すぎて背筋がぞくぞくと震えてくる。

それがこわくて、サキュバスにぎゅつと抱きつく。腰から生えている尻尾も連動してぼくに跨がっているサキュバスの足に巻き付けてしまった。

「あつ、もう！ そんなすぐに食べちゃいたくなるような可愛いことしないで！」

困ったように笑うサキュバスは、ぼくを抱きしめ返してぼくの頭をその大きな胸で覆い尽くしてくる。柔らかさと息苦しさ、それからぼうつとしてくるような甘い香りが鼻腔をくすぐってくる。

きつとこれはサキュバス由来の男を誑かすフェロモンなのだろう。

そうと分かっているにも、包容力のような物を感じさせるこの香りの前では為す術も無く堕ちてしまう。それくらいに警戒心を緩める香りだ。

サキュバスに対する忌避感を消され、そして今は警戒心すらも溶かされた。

そして、いつのまにやらぎゅうつと甘えるようにサキュバスを抱きしめ、そしてすんすんと種族特有の発達した嗅覚でサキュバスの香りを楽しんでる自分がいた。

もうそうするのが当たり前のようだった。

「こんなに甘えられたら、どうしようもないわねえ……」

表情は見えないがおっとりとした口調で、苦笑しているかのような態度でぼくを抱きしめ返してくれるサキュバス。

その甘さに、ぼくはもう彼女に襲われていることすら忘れてしまっていた。この心地いい夢の中で気持ちいいことをしていたい。その思いしかなかった。

すりすりと少しずつ体を密着させてくる。その度にすり込まれている本能が鎌首をもたげってくる。目の前の女と事を為したいと。

ぎゅうつと抱きしめてサキュバスの香る、淫靡な甘い香りを楽しむ。

これからどうすればいいのかわからないけれど、それだけで楽しい。

「うーん、初めてじゃこの先どうしていいかわからないのは仕方ないっかー」
困ったようなサキュバスの声が上から降ってくる。ぼくだってどうしたらいいのかわからない。

アルに娼館でどういう事をするかの話だけは聞いていたけれど、行為の詳しい内容ややり方なんて全く聞いたことも無かったし。

サキュバスはぼくから離れると、ベッドに座るぼくの間に割り込んで来た。

そして、女の刺激で勃起した半分皮を被り、ぴくぴくと震えるぼくのペニスを優しく包み込むように握

り締める。

ひやりとしたサキュバスの手の感触が、さつき撫でられた時よりも強く感じられる。包まれた手の中で、ペニスがびくりと大きく震える。まるでサキュバスの手を膣内に本能が見立てているようだった。

そしてそのままずるりと被った皮をズリ降ろされる。密着していた皮膚が剥がれる感覚と、なんとも言えない不思議な感覚が一瞬で駆け巡り――

びゅっ！　びゆる！

腰が震え、尿道から尿とはちがうどろりとした物が断続的に飛び出した。

「ひゃっ！」

サキュバスが小さな悲鳴をあげる。

「もう、勿体ない！」

顔に掛かった青臭い白い液体を丁寧な指で拭うと、パクリと口の中を含み、嚥下する。

それがなんとも淫靡で、ペニスが大きく膨らみ尿道の中に残った液体がとろりと尿道口から溢れてくる。

「んんんんんんんん！　初めての味だあ！」

目をキラキラさせながら、サキュバスは大仰に悦んでいる。

「はじ、めて……？」

そこでぼくはつい言葉が漏れた。

「まさか、精通が私だなんてねえ、幸せなのか不幸なのか」

唇を尖らせて、可愛らしさを強調するような声でサキュバスは考え込んでいる。

そして精通という言葉で、ぼは自分のペニスから飛び出た白い何かの正体に気がついた。

アルが言っていた射精という行為で出る代物だ。

きつとそうに違いない。

「でも、まあ、そう言う事なら、しようがない」

一人勝手に納得したようにしゃがみ込んだままぼくをみあげると、

「んん、やっぱり直接精液を飲むのは美味しいわあ！」

ぱくりと、尿道口から溢れてそのままだった精液を口に含み身体を震わせた。

「あうう……」

強烈な刺激にサキュバスの頭を掴む。

本能的にこれ以上ペニスを口に含まれていたらもっと酷い事になると思ってしまった。

しかし、サキュバスはその反応が思った以上に面白かったのか、ぼくを見上げながらにんまりと笑うと、腰をつかみ逃げられないようにしてきた。

「ふほひひやけ、ひひめひやほう」

ぼくのペニスを啜えたままもごもごと何か喋るサキュバスに、勘が逃げなければと告げていた。

だが、その勘が閃いた時には時既に遅くサキュバスの攻め手を一心に受け始める所だった。

「んじゅっ……」

一際大きな唾液の音を立てると、亀頭の傘の部分の段に沿ってべろりと舐められる。

背筋にぞつと寒気が走り、未知の刺激に腰が引けそうになるが、しかしがっちり捕まえられ逃げられなくなっており、ただひたすらサキュバスの口の中でペニスに刺激に暴れ跳ねるのみだった。

「あつ……あつ！」

得体の知れない感覚に悲鳴に近い声しかあげることが出来ない。

一つだけわかることがある。

この行為が決してアルが娼館で行っているような行為ではないということだ。

ペニスに吸い付いたままのサキュバスは、まるでぼくのペニスの形を完全に理解しているのか、口に含んだまま、時に激しく時にゆっくりと刺激を与えてくる。

それに訳の分からない快感めいた物を腰に感じながら呆気なくサキュバスの口内に精を解き放った。一番最初の皮を剥かれた時には段違いの回数数の拍動がサキュバスの口の中で起こる。

びゅっ！　びゅるっ！　びゅるる！

びくんびくんと精を解き放つ。

その開放感極限まで我慢した時に用を足したときのような開放感だった。

「あっ……はあ……」

吐息をつき、我に返る。

見下ろすとサキュバスがにこやかにぼくの出した精液を飲み込んでいた。

ジリッ。

その様を見て下腹部に焼けるような痛みがした。

「あはあ……おいつしい……」

サキュバスがうっとりとした表情でぼくの精を味わっている。しかし次の瞬間にはぼくを見て目を丸くしていた。

「ありや、あなたもしかしてこっち側の人だったの？」

言っている意味が分からない。

「な、なに？」

「ほら、そのお腹の同族の証。まだ未完成だけど」

つんつんと、ぼくのお腹の痛みが走った部分をつつく。よくよくみるとそこにはアザのような物が浮か

び上がっていた。

「うーん、そうなると絞るわけにはいかないし、けどこのまま帰してもきみが可哀想だし……」

ぼくの横に腰掛けると、サキュバスは胸を持ち上げるような形で腕を組み考え込む。

「そうなると、こっち側に引き込んだじゃおうかな」　にっこりと笑うと、サキュバスはぼくを押し倒すよ

うに口付けをして来た。

一瞬の事で、気がつけば口の中に舌を入れられ口内を舐め回される。

そして唾液が送り込まれると、すっとサキュバスが離れて行く。

「それ、飲んでね」

反射的にごくりと嚥下してしまった。

甘みのある味だ。

途端、お腹の奥底から熱が湧き出てくる。

射精して少しだけ萎えていた。ペニスが無通りにそそり立ち、今にでも目の前のサキュバスに精を解き放ちたい衝動に駆られる。

「一体何をした、の」

「サキュバスの体液って、結構きつつい媚薬なんだよね、肌で感じる分には快感が増えてお互い楽しくなつて、勝手に死んじゃうんだけど、体内に取り込むとね——」

そこまで言つて、サキュバスはぼくの耳元に口を近づけて囁く。

「淫魔の因子で、サキュバスになっちゃうの」

そう言つて、ぼくをまた押し倒した。

サキュバスになるってどういうこと。

そう口にしたかったのに、その口はサキュバの口付けによって塞がれてしまった。

口内を蹂躪され、また唾液を飲まされる。

お腹の奥が熱くなり、自分の意思に反して勃起した。ペニスがびくんびくんと大暴れを繰り返す。

「うう……あう……」

沸き上がる熱に言葉がでない。

しかし、熱が頭の奥底に達すると、たった一つの思いだけが心と体を支配する。

それは、目の前の女に枯れるまで精を解き放ちたい、という雄としての本能だった。
「ほら、良く見て」

サキュバスはぼくに馬乗りになったまま、そんなことを言う。感情は目の前のサキュバスに精を解き放つという思いで一杯なのに、何故か身体が動いてくれない。

そんな中、サキュバスはぼくのお腹まで反り返っている。ペニスを優しくつかむと、ぐいっと天を突くように上へと向けた。

わざとらしく、ペニスを自分の下腹部に当てると、

「きみのおちんちん、私のここまで入るんだよ」

につこりと笑いながら、サキュバスは地肌にぼくのペニスを貼り付ける。

びくりと。ペニスが震える。

「あん……☆」

サキュバスの下腹部を押し返すと喘ぎ声が聞こえてくる。

「もうっ、そんなに待ちきれないの？」

しようがないなあと、呆れた様な声をあげながら、サキュバスは立てたペニスの上にまたがる。

「ほら、今から君の童貞、もらっちゃうからね。サキュバスの膣で出したら最後、他の女の子では絶対にイケない体験させて、あ、げ、る♡」

ああでも、と顎に人差し指を乗せ考える仕草をすると、

「でも私が最初で最後になるから、意味ないっか」

そう笑って言った。

「それじゃあ、いったきまゝす☆」

鈴口が彼女の秘所に触れる。

封を切ったかのように秘所から蜜が漏れ、露がぼくのペニスを濡らしていく。感触だけがはっきりと分か

る。

入り口のほんの少しの抵抗。亀頭が締め付けられペニスが擦れる少しの痛みがあつたかと思うと、愛液の潤滑油が綺麗に行き渡りゆつくりと飲み込まれて……食べられていく。

そして、ぼくのペニスの付け根と彼女の秘所の入り口がしつかりと密着した。

彼女の股の柔肌が吸い付くようにぼくの肌と密着をしている。それが性別の違い、種族の違いという物を分からせてくる。

「あっ♡さいっこう……♡」

頬を赤らめうつとりとした表情をしたサキュバス。暫くぼくのペニスを味わうかのように何の動きも見せない。

けれどもサキュバスの呼吸が僕を責め立てる。

息を吸えばサキュバスの膣内の僕のペニスを締め上げ、逆に吐けば緩めてくる。

それはぼくの呼吸のリズムに合わせたかのように責め立ててくる。

まだ動いてすらないのに、余りの気持ちよさにおかしくなりそうだ。

ほんの少しの回数サキュバスがゆつくりと身体を上下させる。

ぐちゅ、ぐちゅと粘ついた水音が響く。

「う、うう……」

与えられる快感に、ペニスが大きく膨らむのが自分でも分かる。

サキュバスが身体を倒して、ぼくに身体を近づけてくる。

「出したい？ もう出したいよね？ わかるよ、きみのおちんちん、膨らんで来てるもんね」

頭の天辺に生えている耳を指先で弄りながら、そんな甘い囁きをしてくる。

「でも、出すか出さないかは自分で決めてね。サキュバスに精を捧げて、淫魔の因子を開花させてサキュバスになる気があるなら、情けなく自分で腰を突き上げるか、私を玩具みたいに上下させて射精するか、

それともそのどっちもするかしてね☆」

そんなこと言われたって、もう、射精感はずぐそこまで上がってきている。あとほんの少しの刺激ですぐにでも射精をしまいそうだ。

頭の中には我慢なんかよりも、もう射精をして楽になりたいという気持ちしかなかった。

だって、アルが言うように、セックスがこんなに気持ちいい物だなんて思わなかったから。だから、もう色々考えることは止めた。

お腹に浮き上がったアザもじりつと熱を帯びる。

——もういつか。

何も死ぬわけじゃない。結局男のままサキュバスに捕まった時点で精を搾り取られて死ぬわけだし、自分がサキュバスになって生き延びられるなら万々歳ではないだろうか。

ただまあ、種族の特性上アルと一緒に冒険者家業を続ける事はもう無理だろうけれど。それだけが残念かな。

そう吹っ切れると、後は身体が勝手に快楽に身を任せてくれた。

挿入して上に乗っているサキュバスの太股に手を置くと、ぎこちないながらも自分で腰を動かす。ベツドの上で、腰を跳ねさせるだけの簡単なものだけど、それでも気持ちよさはサキュバスに動かれているときより段違いに気持ちがいい。

「あつ！ ああ！」

「わあ！ 初めてにしては上手だよ、そうそうやって私に種付けするみたいに勃起したおちんちんを奥の奥まで入れて——」

サキュバスの声とともに、精を解き放つ。サキュバスの身体をぼくの身体に押しつけて、たまった精を奥の奥へと解き放つ。

「あ、はあ……！ おいし……！」